広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	異質な語りを持つ他者との対話と記憶の語り直しを支援する平和教育 ： 広島大学・教育ヴィジョン研究センターの試みから
Author(s)	草原, 和博
Citation	ぷらくしす , 23 : 53 - 61
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52232
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052232
Right	
Relation	

異質な語りを持つ他者との対話と記憶の語り直しを支援する平和教育
ー広島大学・教育ヴィジョン研究センターの試みからー

草原和博（広島大学教育ヴィジョン研究センター長）

1．はじめにーEVRI とは何かー

本稿は，広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）が「記憶」をめぐって実践してきた試みを，包括的に報告することを目的とする。

EVRI は，2017 年に設立された新しい研究組織で，２つの顔を有している。１つは，教育問題の学際的な研究と国際交流を支援する組織であり，人間社会科学研究科に置かれた附置センターとしての顔である。もう１つは，広島大学が世界規模の先進的研究を進めるために指定されたインキュベーション研究拠点としての顔である。理念は By EVRI, For Everyone。EVRI を起点にすべての人に学びの経験と喜びを保証するイノベーティブな教育をデザインし，それを社会に提言・実装することをミッションに掲げ，研究を進めてきた。

このミッションを実現するために３つのヴィジョンが設定された。第１に，現行システムとは異なる代替的な教育デザインを提案すること，第２に，提案に留まらず，新たな教育デザインを社会のなかに実際に根付かせること，第３に，そのような社会実装を行うことのできる専門家の育成と交流を担うこと。本稿で紹介する「記憶」に関する教育の研究・開発も，このような文脈で行われてきたものである。

「記憶」に関する研究・開発を主に携わってきたのは，EVRI を構成する４つのユニット（図１）の内，「平和・市民性教育」ユニットである。本ユニットには，主には川口広美准教授，金鍾成准教授，川口隆行教授，そして草原和博教授が分担または連携しながらプロジェクトを進めてきた。なかでも国際理解を専門とする金准教授は，「他者の語りに開かれた平和教育」の視点から「記憶」の研究・実践を牽引している。

図１　EVRI のユニット構成

以下，「平和・市民性教育」ユニットの近年の活動を紹介したい。

2021 年２月 27 日，「困難な歴史（difficult history）」の記憶をめぐって学術会議を開催した。第二次世界大戦をめぐるアジア各国の対立する記憶がそれぞれの地域の歴史教育に与えた影響と，教育を通して実現されるべき歴史和解の可能性について，日本，台湾，韓国の研究者が議論を展開した。

川口，金，草原らは，研究面だけでなく社会貢献でも協働している。対話を通して「記憶」を継承する平和・政治教育のカリキュラムを開発・実践し，学校への実装を支援してきた。

一連のアウトリーチには大学院生を参画させ，共同で論文を執筆してきた（例えば，草原・尾藤・福元ほか（2018））。そうすることで，研究者としての能力をもったリサーチャーはもちろん，教育ヴィジョンの実現に向けて計画・遂行できるプラクティショナー，実践を通して社会変革を牽引できるイノベーター，そして新たな教育ヴィジョンの価値を市民と語り共有できるコミュニケーターを育成している（図２）。本稿で提示する「記憶」に関する教育実践は，上述のように，大学院生を巻き込んだ研究・開発の１つとして行われた実践である。

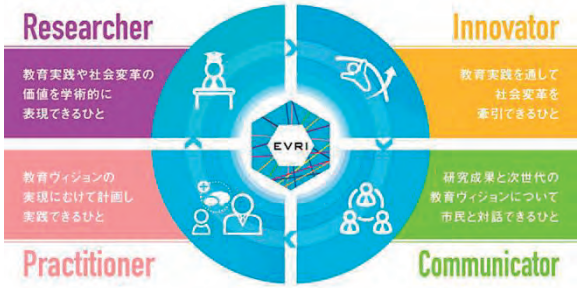

図２　EVRI の若手研究者育成構想

2. 日本の学校教育における記憶とは

なぜ今，日本の学校教育で「記憶」を扱うことの意義が再検討されなくてはならないのか。また平和教育と政治教育を主たる研究領域とする「平和・市民性教育」ユニットが，なぜ共通に「記憶」の問題に関心を寄せるのか。

この点については，Kim, Kawaguchi, and Kusahara（2021）が詳しい。同論考の内容を簡潔に要約すると，以下のようになる。

> 日本の戦後教育の骨格は，端的には，反戦感情を伝え，植え付けることだった（Berger, 1993）。その点で重要な役割を果たしたのが平和教育であり，平和教育とはイコール反戦教育を意味した（Ishikida, 2005）。平和教育では，軍事力がもたらした庶民の悲しみや苦しみを，広島，長崎，沖縄という「記憶の場」に焦点化して教えてきた。言い換えると，これらの土地に災いをもたらした軍国主義や全体主義は否定されるべきという「記憶」を伝えることと，平和を希求することは同義と見做されてきた。
>
> 戦争なき世界を実現したいという強烈な記憶は，戦争責任から目を背けさせるという副次的な効果をもたらした。被害者意識を強調した第二次世界大戦の集合的記憶は，「悪いのは国家と軍人，庶民は無実」という感覚を生み出した（Orr, 2001；Pyle, 1992；Direkes,

2010)。戦争責任を扱う教育実践は，平和教育のメインストリームとはなっていない，なるべき基盤がないと言っても過言ではない。事実，文部科学省が定める小学校社会科で扱うべき歴史上の人物 42 人に，第二次世界大戦を主導した政治家，軍人，そして天皇の名前は一人も出てこない。今なお，私たちは 20 世紀の困難な歴史に向きあうことを政治的には奨励されていないし，制度化もされていない。戦争責任を扱った実践は，あくまで草の根的に行われてきた。

Kim, Kawaguchi, and Kusahara（2021）が指摘する日本の平和教育には，共通する２つの教授学的課題が内在した。1 つは，しばしば教師が大事する平和に関する記憶が圧倒的な勢いで教えられてきたこと。生徒がその語りを解体したり，自分の記憶として再構築したりする機会は奪われ，学習者が平和のエージェントであるという思想は定着しなかった。２つは，子どもが世界に平和を誓うことはあっても，それは独善的で一方的な思いとして作られてきたこと。異なる考えを持つ他者との対話を通して記憶を語り直していく姿勢と資質は，十分に育成されてこなかった。

結果としてアジアでの国際的な歴史和解は進んでいない。学校空間を，先人の「記憶」を再記憶させる装置とするのではなく，「記憶」の仕方を語り直す公共圏へと作り替える（金，2020，p.15）ことが，「記憶」の教育に問われてくるわけである。

そのための方法論として EVRI が追究し提起してきたのが，「記憶の伝承装置」（Grever & Adriaansen, 2017)となっている①博物館，②教科書，③アーカイブ等の語りを再構築することだった。すなわち，そしてこれらの「記憶の伝承装置」が伝える語りを一度解体し，学習者があらためて①博物館をデザインし直したり，②教科書を書き直したり，③アーカイブを編集し直したりする活動を行うことである。対立する語りをもつ他者と対話することで，「記憶の伝承装置」に深く刻み込まれた集合的記憶を相対化し，共同で語り直す方法論は，徐々に関係者の間で確立され，平和教育として実装，実践されてきた。

次章ではこのような文脈で確立されてきた EVRI での実践例を紹介したい。

3. 記憶について他者と語り，語り直す教育実践

(1) 広島の資料館の語りの再デザイン

－平和記念資料館のラスト 10 フィートを再デザインしよう（2017)－

第 1 に，博物館を再デザインさせる活動例である。この実践は，広島県教育委員会が実施した OECD イノベーションスクール事業の一部である「サマースクール」を EVRI が受託し，企画・実施したものである。インドネシア，フィリピン，ニュージーランド，米国，そして日本の高校生約 40 人が広島に集い，平和の価値について追究した。そこには，植民地に「された」側と植民地に「した」側の国の歴史を学んできた生徒が共存した。一方でマオリ族の高校生のように，第二次世界大戦をほとんど学んでいない生徒もいた。

これらの高校生がヒロシマについて共に学ぶ３日間は，チャレンジング以外の何物でもなかった。5 か国の高校生は，平和記念資料館の展示を見に行き，観覧者に聞き取りをした。被害に悲しむ声をあげる人もいれば，戦争の一面しか描いていないと強い不満を浴びせる人もいて，生徒らは困惑した。さらにオバマ元米大統領の広島訪問について，異なる評価や賛否を示す関係者の見解を読んだり，アジア各国の報道を比較したりした。

高校生の最終課題は，博物館の語りをあらためて精査し，資料館で「語られていない語り」やあなたが「もっと強調したい記憶」を造形物に託して，表現することだった。それが「平和記念資料館のラスト 10 フィートを再デザインしよう」の学習課題である。平和記念資料館の出口に置いてもらう意図で制作された高校生の作品とそのメッセージは，EVRI のホームページで閲覧可能である。本企画のカリキュラム編成と子どもの学びについては，Kim & Kusahara (2020)と Kim, Kuashara, Kawaguchi, Komatsu (2020)に詳しい。

(2) 米国の博物館の語りの再デザイン
－米国国立太平洋戦争博物館の出口を再デザインしよう(2019)－

第 2 に，アメリカの博物館を再デザインさせる活動例である。本実践は，広島大学教育学部が開講する「戦争と平和の教育学」の一環で 2019 年に実施された。（1）で紹介した高校生向け実践を，金鍾成と草原和博が大学生向けにヴァージョンアップして実施されたものである。本授業は，授業担当者らと交流してきたテキサス大学オースチン校の協力があって実現した。授業の主たる目的は，太平洋戦線で活躍したニミッツ提督の偉業を記憶した国立太平洋戦争博物館の訪問と展示の再構築にあてられた。

米国海軍の国立博物館がテキサス内陸の小さな町に置かれているのは，そこがニミッツの生誕の地だったからである。学生は，同博物館における戦争の描き方が日本で習った語りとは違うことに驚く。とくに戦争終結を語る博物館最後の展示室が，自由への戦いを正当化し，「運命づけられた使命」として讃えることに違和感を覚えた。

この経験を受けて，学生は最後の展示室に，この戦争は自由への戦いだったのか,そうでなかったのか，異なる視点から戦争を振り返る２つのドアを示し，観覧者の出口を分ける展示案を構想した。観覧者自ら出口を選び，ドアを開けるという行為を通して展示の意味を省察させる意図があったと解される。学生らは，このプランをテキサス大学の大学院生らに提案し，太平洋戦争の記憶のされ方について議論を行った。

(3) 教科書の語りの再デザイン
－より良いヒロシマの教科書をつくろう(2019)－

第 3 に，教科書を再執筆させる活動例である。本実践は，2019 年に金先生が広島大学の「教養ゼミ」として 2019 年に実施したものである。後に（4）で紹介する中学生対象の実践に先行し，大学生向けに行った実践として位置づく。

金は，歴史認識をめぐって対立する日本と韓国の大学生，とくに社会科教師を志望する学

生を対象に，「より良いヒロシマの教科書を作ろう」というプロジェクトを展開した。学生は自分たちが高校までに学んできた歴史教科書の記述を振り返り，また両国の歴史叙述を比較し，原子爆弾やヒロシマの扱い方が異なることを知る。

双方ともさらに文献調査を行い，「より良いヒロシマの教科書」を提案し合うとともに，記述の見直しを進めた。最終的に韓国側は，日本の帝国主義の歴史を強調しつつ，日清戦争以降の侵略の歴史から第二次世界大戦までを書き進め，原爆投下の事実を植民地支配からの解放と韓国独立の契機として位置付けた。さらに原爆が人々に与えた影響を記述するとともに，最後に日本とドイツの戦争責任の取り方を比較する活動を設定した。一方，広大側の記述は，途中までは韓国版と類似したが，後半で差異が生じた。広大版では，戦後の広島の復興と，世界に向けた核兵器反対のアピールを強調し，最後に各国首脳の核兵器に対する態度を比較する活動が設定された。

結果的に，記憶すべきことのズレが容易には埋まらないことを記憶する学習となった。

(4)アーカイブの語りの再デザイン
ーヒロシマの平和教育者の語りのアーカイブをつくる(2020)ー

第 4 に，にアーカイブを再編集する取組例である。

本実践は，2021 年に EVRI が主催する PELSTE2021（Peace Education and Lesson Study for teacher Educator in 2021）という国際セミナーで実施された。パンデミック以前の PELSTE では，世界の有力な教育学部が結成する INEI に加盟する大学から研究者を招聘し，広島の平和教育（peace education）と授業研究（lesson study）を体験する機会を提供してきた。しかし，パンデミックで外国との往来ができなくなると，方針を転換せざるを得なくなった。

その結果講じられた代替措置が，平和教育を追体験させる教材の提供である。あらかじめ平和教育者にインタビューを試み，実践記録や写真等と合わせて動画に編集するとともに，専門家 2 名の解説動画も用意した。PELSTE2021 では，これらの動画を共通のテクストにして，各国の研究者が平和教育の目指すところの普遍性と文脈依存性をオンラインで語り直す活動を用意した。広島には，戦後の平和に関する運動や授業の記録がたくさん残されているが，それも散逸の危機にある。そこで海外の PELSTE 参加者に「広島の平和教育者」の熱意と困難を伝える目的で，世代を異にする 3 人のオーラルヒストリーをアーカイブし，同時に資料の集約を試みることとした。

なお，この過程は，膨大な資料と語りの中から一部を切り取り，編集するという過酷な営みだった（草原・松宮・三好ほか，2021，草原・小山・川口ほか，2022）。このアーカイブの作成と解説，批評という一連の活動をすべて（教員志望の）学生が担うならば，その活動は新たな平和教育と教師教育のカタチに発展していく可能性を秘めている。

4. 記憶について他者と語り，語り直す統合教育プログラム
－広島県立広島叡智学園の Global Justice（2020）の共同開発－

これまで博物館，教科書，アーカイブ等の「記憶の伝承装置」が伝える正統な語りを，現代の学習者が他者との対話を通して語り直す試みを紹介してきた。最後にこれら３つの方法論を統合したプログラムを紹介したい。それは，広島県立広島叡智学園中学校・高等学校，Hiroshima Global Academy（HiGA）と共同開発した Global Justice のプログラムである。

HiGA は 2019 年に開校したばかりの瀬戸内海の小島に作られた県立の学校である。インターナショナル・バカロレアに認定されている点で特異な公立校である。同校が「総合的な学習の時間」の１領域として Global justice の１年課程を設置するにあたって，EVRI はカリキュラムの開発と実践について相談を受けた。EVRI はこれまでの研究・開発の成果を共有し実装する格好の機会ととらえ，協力することとした。図３に示すように，2019 年 11 月から 2020 年 10 月まで，先に紹介した３つのアプローチを組み込み，Ａ：教科書，Ｂ：概念，Ｃ：博物館，そしてＤ：総合の４つの連続したプロジェクト学習を開発し，実践した。以下，順次紹介したい。なお，本プロジェクトの様子は動画にまとめて YouTube で公開されている。

(1) A プロジェクト

Ａプロジェクトは，「教科書プロジェクト」とも称してきた。本プロジェクトでは，HiGA の中学生が米国カリフォルニアの小学生が協働して「よりよいヒロシマの教科書をつくる」ことを目指した。

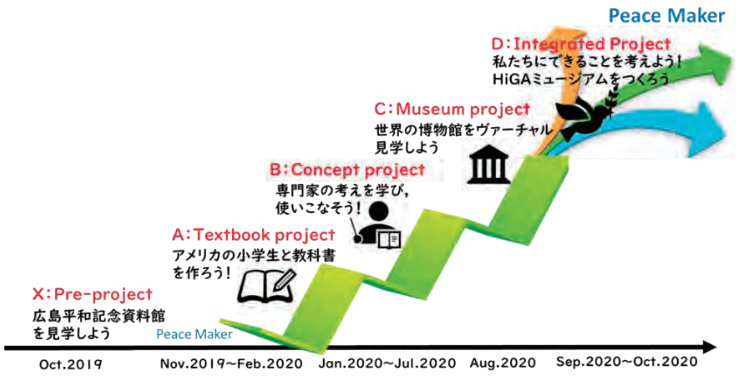

図３　Global Justice の年間課程

単元の冒頭で，HiGA の生徒は，原爆の原料を精製した米国のある街の学校のロゴは，きのこ雲を採用していることを知り，驚く。さらに両国の歴史教科書を分析していく過程で，原爆での死亡者の数え方が日米の教科書では異なること，米国の教科書では大統領の原爆投下の意思決定の可否を評価する文脈で原爆が出てくるのに対して，日本の教科書では第二次世界大戦上の出来事であり，人道上の問題が問われていることに気づいた。

両校の子どもは互いの教科書を 2 度にわたって批評し書き換える交流を続け，最終的にヒロシマをテーマとする教科書を完成させた。HiGA の生徒は，当初の想定とは異なり米国

の子どもが自分たちの主張に理解を示したことに驚くとともに，（歴史教科書や学校のロゴのように）「米国人はみんな原爆投下を正当化している」と過度に一般化して捉えることの危うさに気づけたのが成果であると自己評価した。

(2) Bプロジェクト

Ｂプロジェクトは，「概念プロジェクト」の別称を有する取組である。生徒は，紛争理論，ゲーム理論，分配的正義，積極的平和，ラベリング理論，権威主義的パーソナリティ，それぞれの概念を定義するとともに，それぞれの概念で典型的に説明可能な歴史上の，あるいは現代の諸事象の分析を試みた。

単元の最後では，一貫性に欠くかにみえる一連の諸概念を「平和」という視点から整理し構造化させる課題を与えた。生徒は，これらの諸概念を，①平和の意味や範囲を定義する概念，②平和を脅かす原因を説明する概念，あるいは③平和を実現する方法を提案した概念として捉え直し，その関係を図に表し，再編集していった。

毎回の授業では，抽象的な概念を日常生活の文脈に置き換え，具体化を図る活動を行った。例えば，「権威主義的パーソナリティ」の概念を学ぶ場面では，主にはアイヒマンがユダヤ人になぜ冷酷な態度をとりえたかを分析する。一方でそれを他人事，歴史的出来事として突き放すのではなく，自分自身も，学校でまたは寮生活の中で，アイヒマンのような盲従的な意思決定をしかねない可能性を省察させる場面を設け，概念世界と生活世界との往還をはかる授業展開を保証した。

(3) C プロジェクトと D プロジェクト

CDプロジェクトは，博物館づくりとその仕上げを目指す取組である。2020 年の４月から７月にかけて当初は大和ミュージアム等を訪問し，同ミュージアムが示す戦争の語りと平和記念資料館のそれとの違いを探究する活動が計画されていた。しかし，パンデミックのため校外学習ができなくなり，博物館見学は夏休みのヴァーチャル博物館見学に置き換えられた。

幸いなことに，どこの博物館もヴァーチャルな見学環境を充実させていた。子どもは，韓国の戦争博物館や米国の LGBTQ 博物館を含む海外５つの博物館と日本の６つの博物館を取り上げ，語りの内容や伝え方の工夫を分析し，レポートにまとめて報告した。

レポートの共有・振り返りの過程で持ち上がったのが，博物館が展示するのは「歴史」か，それとも「物語」かという問いである。最終的には，博物館の展示は一定の立場に基づいて歴史を再構成した「物語」であるとの理解に至った。またその視点に基づいて，展示物の選択や表現，配列を比較していくことで，各博物館に蓄積されている語りと記憶，そして展示目的の違いを捉えることができた。

博物館分析の後には，「HiGA１期生のレガシーを残す」というミッションの下，HiGA ミュージアムの設計図づくりが始まった。しかし，クラスの展示テーマはなかなか決まらなか

った。なぜなら HiGA の生徒たちは，これまでの学習を受けて，１つの大きな物語を統一的に示すことは難しいと考え，避けようとしたからである。その結果到達したテーマが，「平和×あなた」だった。このテーマには，展示された概念やエピソードを手がかりに，来館者が自分なりの平和の定義や意味を考えてほしいとの願いが託されている。

5. これからの教育実践の可能性

学校空間を先人の「記憶」を再記憶させる装置にするのではなく，「記憶」の仕方を語り直す公共圏へと作り替えるためには，どのような方法論があるのか。本稿のこの問いに，３つにパターンとそれに対応した実践例，ならびに統合的な実践例を示すことで答えてきた。

しかし，まだ多様な可能性が残されているだろう。平和の記憶のし方は，文化的アイデンティティや家族経験，国籍など一人ひとりの社会的・文化的背景の影響下にあるために，コミュニティの中で正当化されてきた語りとの間で対立や葛藤に直面する場面もあるだろう。しかしそういう葛藤こそが，「記憶」を語り直す原動力となる。声を異にする多様な他者との対話を通して「記憶」を語り直す場をつくることは，学校教育の，そして市民性教育の課題となっていくだろう。

このような課題に応えるため，今後以下のようなプロジェクトの立ち上げを構想している。

第 1 に，歴史教育だけでなく地理教育でも記憶の問題を扱うこと。自国の語りが顕著に現れ，対立が露になりやすいのが，領土問題である。各国の地図には，国民に記憶されるべき「想像された共同体」の範囲と境界が描かれている。そこでー相互理解を深めることも目的にー例えば，中国，韓国，ロシア，そして日本の子どもが対話しながら「東アジアの地図帳」を再デザインするプロジェクトを行なうことは，チャレンジングではあるが，国家の記憶の交流と編みなおしの契機となるのではないか。

第 2 に，平和教育者の声の収集の裾野を広げること。平和教育を実践しているのは，決して日本の，ヒロシマの教師に限られない。ミャンマー，シリア，香港，韓国，パレスチナ，ウクライナなど平和を希求する人々は世界各地にあり，そこには教師がいる。それぞれの土地の歴史に向きあい，各地の教師の実践とその記憶を手がかりにして「世界の平和教育者」というアーカイブを作る。これは「ヒロシマの平和教育者」シリーズで語られた多様な声をさらに相対化し，平和とは何かを考える格好の機会を提供してくれるのではないか。

文献

Berger, T. U. (1993). From sword to Chrysanthemum: Japan’s culture of anti-militarism. International Security, 17(4), 119–150.

Dierkes, J. (2010). Postwar history education in Japan and the Germanys. Oxon,

United Kingdom: Routledge.
Grever M., Adriaansen RJ. (2017) Historical Culture: A Concept Revisited. In: Carretero M., Berger, S., Grever M. (eds), Palgrave Handbook of Research in Historical Culture and Education, United Kingdom: London, Palgrave Macmillan.
Ishikida, M. Y. (2005). Toward peace: War responsibility, postwar compensation, and peace movements and education in Japan. Lincoln, NE: iUniverse.
Kim, J., Kuashara, K., Kawaguchi, H. & Komatsu, M. (2020). Two students' journeys of thinking about the notions of peace through the tragedy of Hiroshima: A comparative case study of the effect of students' historical backgrounds on peace education. In B. Krzywosz-Rynkiewicz & V. Zorbas (Eds.), Citizenship at a Crossroads: Rights, Identity, and Education, Prague, CZ: Charles University and Children's Identity and Citizenship European Association.
金鍾成（2020）. 他者の語りに開かれた市民を育てるー「広島平和記念資料館の『The last 10 feet』再デザイン」プロジェクトと「より良い『ヒロシマ』教科書づくり」プロジェクトを事例にー, 教育哲学研究, 121, 12-18.
Kim, J., & Kusahara, K. (2020). What is the lasting impact of the use of nuclear weapons during WWII in Japan? In a B. M. Maguth & G. Wu. (Eds.), Global learning based on the C3 Framework in the K-12 social studies classroom (pp. 139–154). New York, NY: Routledge.
Kim, J., Kawaguchi, H,,& Kusahara, K. (2021). No More Wars, Friedenserziehung in Japan, Wissenschaft & Frieden , 3, 28-31.
草原和博・尾藤 郁哉・福元正和・城戸ナツミ・高錦婷・近藤秀樹・山口安司・鈩悠介・河原洸亮（2018).平和観の再構築とそのメタ認知を促す授業モジュール，広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域，67，47-56.
草原和博・松宮奈賀子・三好美織・小山正孝・川口広美・金鍾成・岩田昌太郎・丸山恭司・吉田成章・桑山尚司（2021）. INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（２）－「PELSTE2021」の実施計画ー，広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書，19，25-32.
草原和博・小山正孝・川口広美・金鍾成・川口隆行・間瀬茂夫・岩田昌太郎・丸山恭司・吉田成章・桑山尚司（2022）. INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（３）－平和教育者アーカイブの構築ー，広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書，20，刊行予定.
Orr, J. (2001). The victim as a hero: ideologies of peace and national identity in postwar Japan. Honolulu, HI: University of Hawai ʻi Press.
Pyle, K. (1992). The Japanese question: Power and purpose in a new era. Washington, D.C.: AEI Press.